

島根県教育委員会
大田市教育委員会
温泉津町教育委員会
仁摩町教育委員会

平成16年(2004)3月

遺跡総合調査概報 4

不見 銀山

IwamiGinzan

不見 銀山



(上) 本谷地区釜屋間歩付近で検出された、石段と岩盤加工遺構

(下) 貴鉛が出土した釜屋間歩下の第3トレンチの現地説明会風景

発掘調査 research 1

平成15年度は、本谷・宮ノ前・下河原・出土谷の各地区でトレンチを中心とした発掘調査を行いました。

本谷地区の中腹域での発掘調査は初めてで、釜屋間歩付近では石段と岩盤加工遺構が確認され、銀山最盛期の景観の一部が姿を現しました。また、第1トレンチ下層では16世紀末に遡りうる可能性の高い遺構面が検出され、第3トレンチでは灰吹き直前の鉛銀合金である「貴鉛」が出土しました。

宮ノ前地区では、江戸時代初めの石垣が検出され、「町割」との関連が注目されるなど石見銀山遺跡の中でも重要な場所の一つであることが判明しました。

下河原地区では、絵唐津や中国製染付を含んだズリ、カラミが厚く堆積し、その下層では礎石建物跡を確認しました。

出土谷地区では、江戸時代後半から明治期につくられた水路と道の跡を掘り下げ、江戸時代後期の建物跡群の後に、明治期に水路を造り直した状況や、付近の岩盤掘削がそれ以前にさかのぼることが判明しました。

このように発掘調査によって、仙ノ山南側の本谷一帯にも戦国時代以来の遺構が重層的に存在し、銀山七谷といわれる「谷」の部分にも広く関連する遺構が広がっていることが分かってきつつあります。



下河原第1トレンチ
礎石建物跡とズリの堆積



下河原第2トレンチ 土層堆積状況



宮ノ前第2トレンチで検出された、
近世初頭の石垣



宮ノ前第3トレンチ下層の掘立柱穴



宮ノ前第2トレンチ

出土谷III区全景



下河原第2トレンチ



本谷第1トレンチ西側の露頭掘



平成15年度の発掘調査地点
(1/50,000)



本谷第2トレンチ



本谷第1トレンチ

街 道 調 査 research 2

昨年度に引き続いて、戦国時代に銀山から銀の鉱石や銀を運び出したという鞆ヶ浦道と温泉津沖泊道のルート確定と、両ルートにまつわる歴史を明かにするために、現地踏査を交えて文献・石造物・建造物調査などを実施しました。

その結果、1526年の銀山「発見」開発期から1560年代頃まで銀山～上野～鞆ヶ浦間を結んだ鞆ヶ浦道と、次いで、毛利氏が石見を支配した1560年代～1600年頃まで坂根口～降路坂～西田～温泉津又は沖泊を結んだ温泉津沖泊道など銀鉱石・銀運搬ルートを確定しました。また、温泉津と沖泊を結ぶ往還の調査も行い、両者が結び合わされ一体となって温泉津村が成り立っていた跡を明らかにしました。



ルート確定にあたっては文化庁の指導も受けました。



仁摩町上野付近での踏査



温泉津沖泊往還（温泉津西念寺裏）
この岩壁には馬糞もあります。



柑子谷の製錬所跡（仁摩町）
街道沿線にはこのような近代的な遺構も残されています。

文献調査 research 3

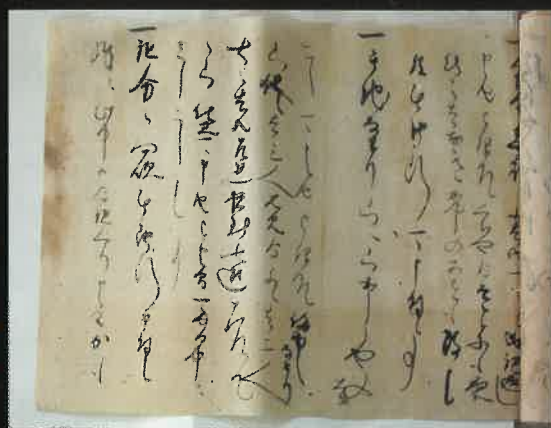
文献調査では、石見銀山・石見銀そのものの研究に加えて、周辺地域や近接する諸鉱山との経済的・社会的な関係について、また石見銀山と他地域の鉱山との関係についても研究に力を入れています。このために広範囲にわたる史料調査を実施しています。史料の所蔵者の協力をえながら、史料の整理・撮影・目録作成をしています。

石見銀及び日本銀の世界的な流通状況を知るために、海外関係の調査も行っています。現在はこれまで収集した史料の翻訳・分析や世界の研究動向の調査を継続しています。

このようにして収集した史料や研究成果を広範囲に活用してもらうために、データベースを充実させるようにしています。



調査風景



江戸初期「川上家文書」11号の一部

佐渡の史料に見る石見銀山の技術者(川上家文書)

新潟県佐渡の川上家文書の調査では、石見と佐渡の結びつきが大変深かったことがわかりました。石見も佐渡も大久保長安による支配を受けたために、佐渡の史料から石見銀山のことを記述した文書を見出すことができます。

川上文書は、佐渡金銀山の支配や経営の実態を知る上での重要な史料です。江戸時代の慶長から元禄頃までの文書が収められており、慶長期とりわけ大久保長安支配時代のものが大部分を占めます。

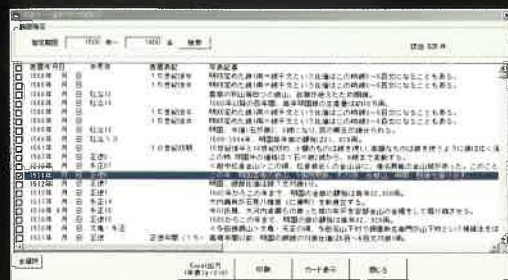
この文書には「其地なまり山へ、山かうしやの者こし可申候由被仰下候、備中之なまり山仕候者三人、石見より参者二人右之者共召連杉針右近まいらせ候て御山貸可申由被申候間」とあり、石見の技術者が佐渡へ移動し、人的交流があったことを示しています。この他にも宗岡佐渡や岩下惣太夫等の石見出身の地役人の活躍を記した史料もあります。

明治4年
「判打帳」明治4年
「諸山出灰吹銀出来灰吹銀書上」安政4年
「銀絞銅掛改定帳」

石見銀山の銀吹師・銀山町年寄の史料(小割家文書)

小割家は江戸時代、石見銀山の銀吹師および銀山町年寄でした。銀吹師は諸山から出された鍍を購入し、灰吹銀・銀絞銅を生産して、それを丁銀または銭に引替えるという機能をもっていました。この史料には、灰吹銀と銭の引替えや灰吹入用などを記した「判打帳」をはじめ、「御用留」、「灰吹銀書上帳」や、町年寄として大坂御銀蔵へ同行した時に記した道程日記もあります。

銀絞銅の請取覚書もあり、そこには銀絞銅を引受けた銅吹所には住友、熊屋、大坂屋駒太郎目、大坂屋又兵衛、岡屋、河嶋屋といった名前を見ることができます。その他、吹入用の覚え書きを綴ったものや、質地証文や銀吹関係の証文などもあります。全体として新しい時代のものが多いのですが、銀吹師の史料としては文献調査で初めて確認できたもので、銀吹師の仕組みがよく分かる貴重な史料といえます。



石見銀山歴史資料検索システム (データベース)

このデータベースは色々な使い方ができます。例えば全体の流れを示す年表を見ていて、特定の事柄を詳しく知りたくなった時には、その年表記事の根拠となった史料や文書の情報、関係ある文献や論文の書誌情報を簡単に参照することができます。さらには、該当か所の史料の写真や読み下し、書き下し、(外国語の場合は翻字、和訳)も参照することができるようにしています。

科学調査 research 4

出土資料の科学的分析～貴鉛の分析～

本谷地区の釜屋間歩付近の、表土の下の18世紀の面からやや浮いた状態で出土した貴鉛です。縦3cm、横2cm、厚さ4mmの楕円形で、重さは13gあります。

貴鉛は、銀の精錬過程で鉱石から鉛を用いて銀を取り出す目的で作られた鉛銀合金です。これから銀生産を飛躍的に向上させた灰吹法により銀が得られます。

科学分析の結果、表面に鉛銀合金を作るための添加物のマンガンを微量の銅を検出しました。内部は鉛の中に15%の銀が粒子状に散らばっています。これから灰吹きすると2グラムの銀が取れる計算で、「小豆大の銀が取れる」という文献史料と一致します。

この資料が出土したことにより、いまままでに出土した鉄鍋炉(石銀藤田地区)や灰吹銀(出土谷地区)とともに、日本で灰吹法を用いて大量に銀を取り出す過程を実証する、極めて貴重な発見となりました。



1997年に発見された石銀藤田地区出土の鉄鍋炉。



本年度、本谷地区釜屋間歩付近の調査で発見された貴鉛。



2000年に発見された出土谷地区出土の灰吹銀。



シンポジウムの開催状況。石見銀山をはじめ甲斐や佐渡などの各地の鉱山遺跡の調査研究の状況が報告され、パネルディスカッションが行われました。



湯之奥金山博物館の全景。



湯之奥金山遺跡について同博物館の谷口館長から詳しい説明を受けました。ここでも世界遺産を目指して頑張っているのを見たいです。

科学調査とシンポジウム参加

科学調査部会では、石見銀山遺跡の特質をより良く知るために、他鉱山遺跡を視察して比較検討したり、同地で行われるシンポジウムや検討会に参加しています。今年は、山梨県で開催されたシンポジウム「生産遺跡から探る〈モノづくり〉の歴史(金山・銀山の技術)」に参加し、石見銀山における発掘調査の状況や科学調査の成果などについて事例報告を行いました。また、同所の湯之奥金山博物館や周辺の史跡などを訪れました。

発掘調査との連携～遺構の精査とはぎ取り～

科学調査は発掘調査との連携が大変重要です。発掘現場の状況にタイミングを合わせながら進めています。

出土谷地区Ⅱ区で製錬の炉跡をはぎ取りしたときの様子を撮った写真です。はじめに隣接する二つの円形の炉跡について、その構造や切り合い関係を調査しました。その結果、同時併存の可能性があることが分かりました。現在、この炉跡の遺存物を科学的に分析することにより、炉の用途や機能について検討中です。



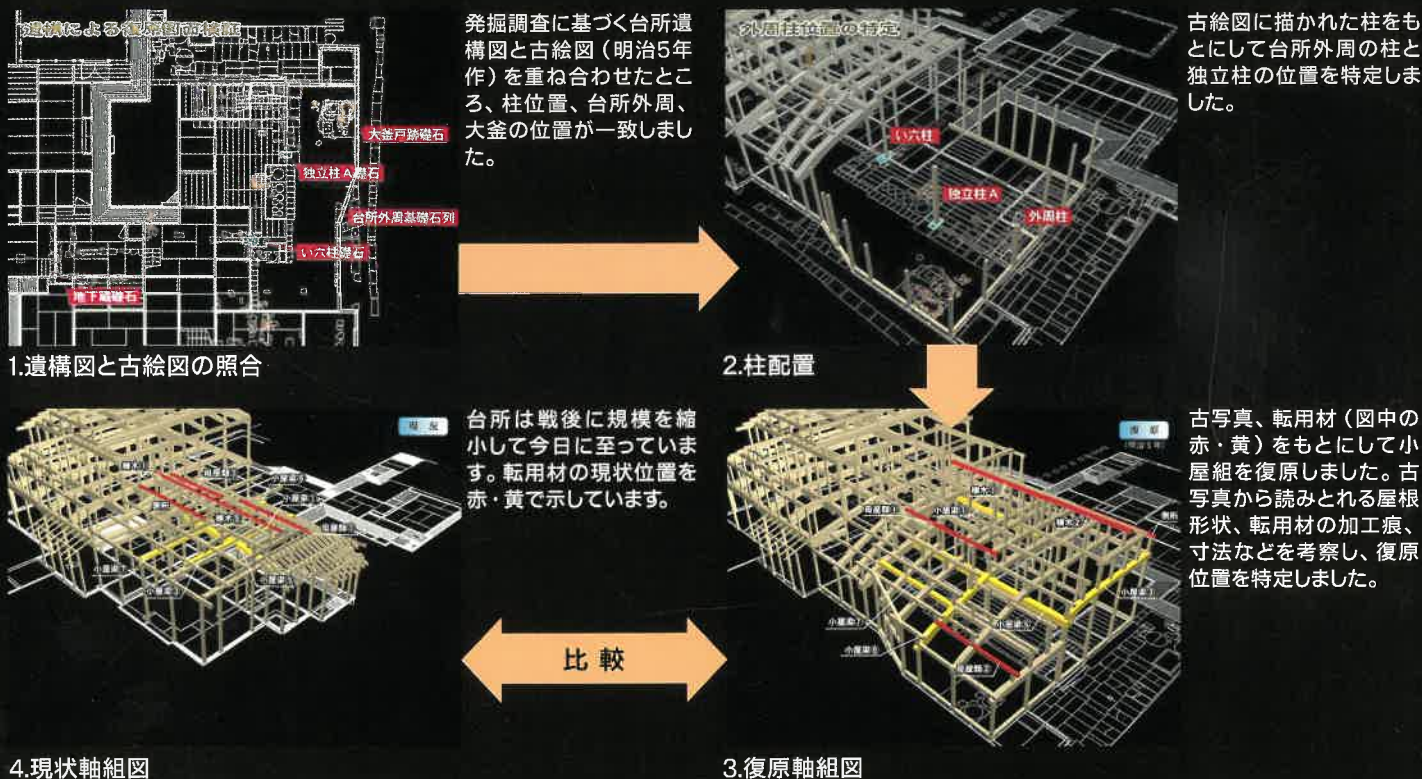
町並み保存地区の調査 research 6

重要文化財旧熊谷家住宅の保存修理

「百聞は一見に如かず」現状変更の3次元シミュレーション

重文旧熊谷家住宅の保存修理事業では、台所の現状変更に関する調査報告及び考察について、写真、3次元レーザースキャナー計測データ、3次元CG動画などのマルチメディア技術を利用して可視化しました。これによって現状変更を判りやすく伝えることができます。

調査の対象は遺構、古絵図、現状の台所に使用されていた転用材、古写真などで、これらをもとに幕末～明治初年の台所を考察しました。(映像提供:文化庁)



住宅・社寺の保存修理～野口家住宅～

今年度、町並み保存地区では民家住宅と社寺あわせて5件5棟の保存修理を行いました。

野口家は平成15年7月の大雨の日に屋根の一部が落ちたため、急拠修理を行なうことになりました。

屋根裏から見つかった板図の表には「寛政十二年七月吉日」「川井勝之助書之」と書かれていましたが、古い絵図でもその場所に川井氏の居宅が書かれたものがあります。「寛政の大火」が寛政12年(1800)3月24日(旧暦)ですから、およそ4ヶ月後の建築ということになります。

裏には墨で図面が書かれ、番付がふられていました。建物配置や板図の情報からすると当初は武家として建てられたようです。その後改造や増築されましたが、板図の番付と同じ位置に同じ番号の書かれた柱が見つかるなど、当初からの部材が今も使われていることが分かりました。

寛政12年の建築であれば大火で焼失した地域の中ではもっとも古い建物となります。



修理後
痕跡や板図により左側の間口2間半・奥行き1間半は後の増築ということが分かりました。

